

外側を愛でる通信山眠る

桜望子

人であれば外見、山であれば桜の開花や紅葉の色づきが「外側」になるのだろうか。どこから送られてくる内側を無視した通信に、眠る本丸は動かない。

君の手を取つて走つて流れ星

お醤油を溢してテーブル

染みは取れずに

いまはじまるの

流れ星の煌めく速さと遠さは未来へいざなう。お醤油の染みに滯る時間と記憶は過去に留まらせる。その引き合いの狭間の瞬発的な今に私たちが宿る。

木琴に粗雑なスペル春の雹

貴田 雄介

木琴の一本いっぽんに書かれている（シール？）音階のスペル。音楽室の楽器に残る他者の痕跡にたどたどしい音階が聞こえる。春の雹が木琴の過去を鳴らす。

連弾もするんだねきみの恋

胃の左右にぶつかりながら

墮ちる石

五月閉じ花

きみの恋はパチンコ玉のようにして左右の障害物にぶつかりながら、鮮やかな

旋律を奏でながら墜ちてゆく。演奏の終わり、消化のすえ、恋の結末は。

塩漬けの桜

あなたの優しさが

早生まれの性質を持つこと

飛和

塩漬けになつて色を保ち続ける桜。どこか寂しくも幼くも感じられるあなたの添えてくれる優しさは、それでも私の気持ちを彩ってくれる。

おすしひとつ交換しよう

はだら雪

大西 美優

特別に嬉しいお祝いのときや特別に悲しいお通夜のときなどに食べるお寿司は感情の食べものだと思う。ひとつ交換して満たされる心が冷たい雪の日に点る。

あさがおをこころの中で

抱えてる

ピーヒヤラ、ピ

ずっと会いたいよ

松浦 やも

夏休みの前の学期の終わりに抱えて帰った朝顔。いまもその帰路のつづきにいて、ずっと何かを待っている。いつだつて踊るリズムが途切れないように。

雪の果おべんとう残してごめん

麓 天海

お母さんへ。貧しい時代を生きた人たちへ。戦渦の子どもたちへ。ごめんの言葉を届けたい相手は、雪の果ての向こうにたちまち白く搔き消されてしまう。

見つめれば焚火は自分の子と思う

八尾保醒

焚火の前に立つと、眼が吸われるよう目に目が離せなくなる。やがて自分の子と思われるまで見つめる炎は、私の視線をいっしんに集めていつそう燃え盛る。

鶏触れた手でじやがりこを
食べていた
ぐらいのことで
ひょんと死んだら

奥野 史也

「ぐらいのこと」で人は死んでしまう。ひょんと死んだら、に続く感情をうまく持ち合っていない。鶏とじやがりこがあまりにも生きる側に属しすぎていて。